

だるま屋少女歌劇



「新春のヴァライテイ・フィナーレ “青春の歌” (1935年1月)

今から 88 年前、福井駅前に県内初の百貨店・だるま屋が開店しました。だるま屋少女歌劇は、そのだるま屋に別館「コドモの国」がオープンした際に県内の少女たちを採用・養成して発足した歌劇部で、1931年（昭和6）11月から36年7月まで、月ごとにプログラムをかえながら店内で上演されていました。支那事変で閉鎖されるまで、DSKとして爆発的な人気を呼び、楽しい夢を贈り続けました。

団員たちは歌劇部解散後も、思い出会「夢如花会」をつくって旧交をあたためていました。

歌劇部解散から60年後の、高田富さん（芸名、霞浦子）、大久保ひな子さん（芸名、石津ひさえ）の手紙を展示ケースで紹介しています。





石津ひさえ

先日、大久保ひな子さん（芸名、石津ひさえ）の御遺族から文書館にメールが届きました。心温まる内容でしたので、文書館ではこれを現代の「手紙」ととらえ、とくに印象的だった文章を紹介します。

福井県文書館 様

突然のメールで申し訳ございません。

このようなインターネット上に母の名前が出ているとは思わなかったものですから、びっくりしてしまいました。

だるま屋少女歌劇部 第5期生 大久保ひな子は私の母です。

残念ながら、母は先週の3月8日にこの世を去りました。享年91歳でした。入院先の職員さんがインターネットにのっている母を見つけてブロマイドをプリントアウトしてくださったみたいです。ありがとうございます！

心残りと言えどもう一度福井へ連れて帰ってあげたかったかな・・・。

母の手紙を保管してくださっていたとは驚きました！

高田様から平成8年に連絡があった時、「ひなちゃんは『行くへ知れず』になっていたの、いろいろ辿ってようやく見つけた」とおっしゃっていたそうです。あの時の母はまるで10代に戻ってしまったかのようにはしゃいでおりましたから、その様子が手紙に書かれていますね。興奮して、私たちに話してくれたことを思い出します。